２０２４．５．２６（日）使徒１５：３０～４１

15:30　さて、一行は送り出されてアンティオキアに下り、教会の会衆を集めて手紙を手渡した。
15:31 人々はそれを読んで、その励ましのことばに喜んだ。
15:32　ユダもシラスも預言者であったので、多くのことばをもって兄弟たちを励まし、力づけた。
15:33　二人は、しばらく滞在した後、兄弟たちの平安のあいさつに送られて、自分たちを遣わした人々のところに帰って行った。
15:35　パウロとバルナバはアンティオキアにとどまって、ほかの多くの人々とともに、主のことばを教え、福音を宣べ伝えた。
15:36　それから数日後、パウロはバルナバに言った。「さあ、先に主のことばを宣べ伝えたすべての町で、兄弟たちがどうしているか、また行って見て来ようではありませんか。」
15:37 バルナバは、マルコと呼ばれるヨハネを一緒に連れて行くつもりであった。
15:38　しかしパウロは、パンフィリアで一行から離れて働きに同行しなかった者は、連れて行かないほうがよいと考えた。
15:39　こうして激しい議論になり、その結果、互いに別行動をとることになった。バルナバはマルコを連れて、船でキプロスに渡って行き、
15:40 パウロはシラスを選び、兄弟たちから主の恵みにゆだねられて出発した。
15:41 そしてシリアおよびキリキアを通り、諸教会を力づけた。

＜説教＞

エルサレム会議では、教会は「聖霊と私たちは…決めました」と言って(15:28)、聖霊の助け導きにより、聖霊なる神のみこころにかなう決議をしました。その決議を〈アンティオキア、シリア、キリキアにいる異邦人の兄弟たち〉(23)、つまりその地方の教会に口頭と手紙で知らせるために、パウロとバルナバと一緒にアンティオキアの教会に行く人がエルサレムの教会の中から選ばれました。それが〈兄弟たちの間で指導的な人であった〉〈バルサバと呼ばれるユダとシラス〉でした(22)。その〈一行は送り出されてアンティオキアに下り、教会の会衆を集めて手紙を手渡し〉ました(30)。〈人々はそれを読んで、その励ましのことばに喜んだ。ユダもシラスも預言者であったので、多くのことばをもって兄弟たちを励まし、力づけた〉(31-32)のです。

このようにエルサレム会議の決議は、書かれた手紙、そしてユダとシラスの〈多くのことば〉によってアンティオキアの異邦人キリスト者たちに伝えられました。それによって彼らは喜び、励まされ、力づけられました。この手紙を受け取り読み、またユダとシラスのことばを聞く以前、人々は〈混乱〉と〈動揺〉(24)の中にありました。それはエルサレムの教会から来たある者たちが「モーセの慣習にしたがって割礼を受けなければ、あなたがたは救われない」と間違ったこと教えていたからでした(1)。それはパウロとバルナバの教えとは違っていたからです。アンティオキアに初めに伝えられた〈主イエスの福音〉(11:20)と違っていたからです。この「動揺させる」と訳されたことばは「軍隊が建物を破壊し、街を滅ぼす」というような意味だそうです。ですからその間違った教えによって

アンティオキアその他の教会は破壊されかけていたのです。その異邦人の兄弟たちの心は破壊され、崩れ落ちかけていたのです。エルサレム会議の手紙、そしてユダとシラスのことばは、そんな兄弟たちを励まし、力づけ、平安(33)をも与えることとなりました。後にパウロは「預言する人は、人を育てることばや勧めや慰めを、人に向かって話します」と言いました（Ｉコリント 14:3)。ユダとシラスはまさにその意味で「預言者」でした。

なお、見落としてはならないことは、ここでも聖霊が確かに働かれたに違いないことです。「励まし（パラクレーシス)」(31)、「励ます（パラカレオー)」(32)とは「そばに呼び寄せる、そばでことばをかける。そうやって励まし、慰め、助ける」というような意味です。主イエスは約束の聖霊のことを「助け主（パラクレートス)」と言われました（ヨハネ 14:16,26. 15:26. 16:7)。つまり、教会が聖霊の助け導き、みこころを求め、それに従って決めたことが書かれた手紙を通して、またその決議に関わって語られたユダとシラスの多くのことばを通して聖霊がお働きになりました、「救われるためには割礼を受け、律法も守り行わなければならないのか」「それはパウロやバルナバが言う教えとは違う」などと混乱し、壊れかけた人々の心を聖霊が慰め、励まし、力づけ、お助けになったのです。そして中には聖霊の働きによって悔い改めに導かれた人々もいたかもしれません。それは、「そうだ、やはり救われるためには割礼も律法の行いも必要だ」とあの間違った教えに引かれ、それに従って行った人々です。またそうやって〈肉において外見を良くし〉(ガラテヤ 6:12)て、パウロとバルナバが受けたようなユダヤ人からの迫害を受けまいとしたりした人々です。その人々は、そのような考えと行いによって聖霊を悲しませ、また怒らせたことを知り、そのことを「嘆き、悲しみ、泣き、笑いを悲しみに、喜びを憂いに変え」、「主の御前でへりくだった」(cf.ヤコブ 4:9−10)ことでしょう。そうして彼らは聖霊に慰められ、励まされ、助けられ、力づけられ、再び平安を与えられたことでしょう。

聖霊の力によって必要な奉仕を終えたユダとシラスはエルサレムに帰って行きました(33)。パウロとバルナバは人々の混乱と動揺が収まったアンティオキアの教会に続けてとどまり、〈ほかの多くの人々とともに、主のことばを教え、福音を宣べ伝え〉ました(35)。

しかしパウロはアンティオキアにずっととどまり続けようとは考えませんでした。〈それから数日後、パウロはバルナバに言った。「さあ、先に主のことばを宣べ伝えたすべての町で、兄弟たちがどうしているか、また行って見て来ようではありませんか。」〉(36)。〈先に主のことばを宣べ伝えた〉働きとは「第一回伝道旅行」のことです（13:1−14:26)。それは聖霊の命令により、聖霊によってアンティオキアの教会から送り出されたものでした(13:2−4)。だから今度のパウロの「第二回伝道旅行」の提案もやはり聖霊の導きによるものと言えます。〈兄弟たちがどうしているか〉とは、単に元気かどうかということだけでなく、「霊的に、その思いとことばと行いにおいて、健全な信仰生活をしているかどうか」ということです。エルサレム会議のすぐ後です。アンティオキアの教会を混乱させ動揺させた教えが〈先に主のことばを宣べ伝えたすべての町〉の教会にまで押し寄せてはいないか、兄弟たちがそんな教えに惑わされてはいないか、また、異教の教えと生活に逆戻りしてはいないか、パウロとバルナバは心を配るのでした。

さてその出発にあたって思いもかけないことが起こりました。〈マルコと呼ばれるヨハネを一緒に連れて行く〉ことについて、パウロとバルナバの〈激しい議論となり、その結果、互いに別行動を取ることになった〉ということです(37−41)。しかし、問題は、エル

サレム会議のときのような「福音の本質」に関わることではありませんでした。第一回伝道旅行のとき、早々に〈一行から離れて、エルサレムに帰ってしまった〉ヨハネ(13:13)に、再び今度の旅行でパウロとバルナバの〈働きに同行〉する資格があるか否かということでした。それぞれの考えをいろいろと憶測することはできます。この時、確かにマルコに対してパウロは厳しく、バルナバは優しくありました。しかしどちらにも「マルコのためを思って」の善意はあったでしょう。どちらも神に祈り考えてのことだったと思います。そして、どちらにも生身（なまみ）の人間としての感情が働いていたことも事実でしょう。どちらもそんな自分の考えを引き下げることはできませんでした。〈その結果、…〉でした。なお、〈パウロはシラスを選び、兄弟たちから主の恵みにゆだねられて出発した〉(40)ことから教会の中の多数はパウロを支持したとする見方はありますが…。

しかしルカが一番言いたかったことは、ここで「どちらが勝った負けた」ということではないでしょう。どちらにもそれなりの言い分があり、また完全ではない（要するに罪人の）人の激しい対立さえも用いて聖霊なる神がどうお働きになったかということが大事です。三人一組による伝道ではなく、二人一組を二つ作って別方面への伝道へと聖霊はお導きになりました。神が主イエスの恵みによって救い、ご自身のしもべとしてお召しになった人（しかし同時になお罪深い人）を聖霊がどう導き、用いて神の唯一最善のみこころを成し遂げられるかが大事です。パウロとバルナバのどちらにも優って、同時にパウロを（そして今後は「使徒の働き」の記述には出てきませんがバルバナをもきっと）用いて聖霊なる神がますます〈諸教会を力づけ〉(41)て行かれたのです。私たちもこの神の最善の導きに信頼し、従い、パウロやバルナバのように神と教会に仕えていきたいと願います。